

第2回 知的障害者の住まい検討部会	
日 時	平成 27 年 6 月 23 日 (火)
開催場所	K R C ビル 大会議室
出席者	赤川委員、五浦委員、浮貝委員、神田委員、齋藤委員、志賀委員、宍倉委員、八島委員、渡邊委員
開催形態	公開
議 題	1 議題 (1) 地域移行するための支援及び地域生活を継続するための支援について (2) その他
議 事	<p style="text-align: center;">— 事務局に資料要求のあった事項について、口頭説明 —</p> <p style="text-align: center;">— 神田委員から、行動障害養成研修について、説明 —</p> <p><b>【主な議論】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この基礎研修は、支援する人が受けないと加算をもらえない研修なので、事業所から提出された研修計画書に記載してある人数よりも増えてくると思う。研修内容も、かなり突っ込んだエビデンスのあるものになっており、質はかなり担保されている。ただし、研修を担う事業所は、ほとんど存在しないのではないか。</li> <li>・行動援護と強度行動障害の研修カリキュラムが同じ形になっており、強度行動障害の研修に出ることで、行動援護の研修に出たと読み替えることが可能である。そのため、研修の質が平準化された強度行動障害の研修に応募する方が増えてしまうのではないかと懸念もある。</li> <li>・単純に、強度行動障害の研修回数を増やしたとしても、行動援護を実施している事業所のヘルパーやサービス管理責任者が（研修を）受けられるまでになるのは、厳しいかもしれない。また、重度訪問介護を利用するには、行動援護のアセスメントが必須になるので、単純に、行動援護に対して移動支援で対応していけば良いということではないと思う。</li> <li>・行動援護の養成研修は、引き続き実施していくことが望ましいのではないかと。横浜の支援者の質をあげていくために、「チーム横浜」でできないかと考えている。強度行動障害者への環境アプローチに取り組んでいきたいと思っても、取り組みきれない事業所が多いと思う。そういった事業所でも主体的に参加する仕組みができると良いのではないかとと思う。</li> </ul> <p style="text-align: center;">— 浮貝委員からGHのサービスの組みあわせについて説明 —</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この事例は、計画相談を通じたカンファレンスが非常に大事だった。月 1</li> </ul>

回カンファレンスを行い、GHでの様子や、関わりの中で有効だったこと、上手くいかなかったことなどを記録したものを報告し、それを共有していった。その中で、やはり、支援者が本人の様子を分かってから、サービスにつなげていくことが必要だと感じた。

・支援手法やその考え方を汎化させていくためには、研修などにより、ヘルパーなど他職種の方への障害（特性）の理解や支援手法の理解が必要になってくると思う。そして、今回のようなカンファレンスの中に、そういった専門的な知識を持つ人が存在することが必要になってくる。さらには、そこで学んだことを、現場に持ち帰って、現場で理解することが広がりにつながってくるのではないかと思う。

・支援者への支援は、観察と記録の仕方について、アセスメントして積み上げていくことであり、自閉症の知識を教えているのではない。それは、本人から学ぶことだと思うし、そのように職員へも伝えている。確かに記録することに迫られるが、それこそが毎日の支援だと思う。

・居宅介護の支援を厚くすれば、行動障害の方の問題がすぐに解決するというのではなく、そこには必ず、研修とスーパーバイズする方が参加する仕組みが欠かせないと思う。

・緊急時の応援を要請できる体制は整っていなかったが、何かあれば駆けつけるなどしていた。また、今回は、（私が）直接支援したわけではなく、月1回のカンファレンス（間接支援）だけで、支援を組み立てた。

・今回の事例からも見えてくるのは、行動障害が表出していたのではなく、表出させられていたということだと思う。二次障害の原因を探り、その方への環境アプローチを丁寧に進めていくことは、多くの方に有効なのではないかと思う。

・カンファレンスなどで、専門家が来て行動障害の知識の話をして、支援者としては「それは知っている」ということになってしまう。そうではなく、支援が有効か否かは、本人の行動に表れてくるので、本人から教えてもらえば良いし、それで周りは納得していくと思う。

・バックアップ体制について、これまで行政は法人に任せてきたと思う。ただ、小さい法人は、バックアップ体制を構築しようと思っても、その人数を調整できないというのが現状だと思う。

・現在、行動障害の人の取り組みをどうしようかと考えており、定期的にアドバイスをいただいている。そこでは、具体的なアドバイスをもらい、それを基に1か月間取り組み、その結果を、現場の職員が抱えている問題などと併せて持ち寄って話すようにしている。これは、現場の職員にとって、非常に有効と感じている。このようなアプローチは、特に小さい法人にとっては有効だと思う。

- ・入所施設の職員は、(施設入所者が) グループホームで受け入れられるというイメージがないのが現状ではないかと思う。
- ・入所施設の職員が地域へ目が向きにくいということは確かにあると思う。それに加えて、ご家族からは「入所施設から出さないでほしい」という声をいただく。
- ・小さい頃から誤学習を積み重ねている方への支援をどうするかも課題であり、早い段階から手を打ちたいという思いはあるが、なかなか難しいのが現状である。浮貝委員の事例を通して感じるのは、キーパーソンがいることが、とても良いということ。ただ、地域の事業所等と連携していく際には、なかなかイニシアチブをとりにくい現状がある。
- ・横浜の療育センターで支援している人から話を聞くと、卒園した人の中で、何年かに1人は、やはり気になるという人がいるようだ。その時に、大きな課題があるわけではないが、そういった方が大人になっていく過程で、より丁寧で専門的な支援が必要になってくるかもしれない。
- ・自閉症においては、個人的には30歳くらいまでは、療育があっても良いと思っている。そのような療育を作り上げることが大きな目標になってくるのではないかとも思う。経験上、思春期でイライラしている中で、そういった場所に通うことで、「ほっとした」表情になるのを見てきた。そういった積み上げが大切だと思うので、しっかりと制度として構築していくと良いのではないかと。もっと生活に根差した療育が必要だと思う。

## — 議題2 その他 —

- ・この部会での議論について、入所施設からグループホームへ移ることが地域移行で、グループホームから入所施設に戻ることが、地域移行の失敗という考えに立っているのか。入所施設だからできること、グループだからできること、それぞれで地域生活が達成できたというような、入所施設とグループホームの垣根を低くしていくことを地域移行としてみるのか、それはどうなのか。
- ・この部会は、地域移行というよりは、行動障害の人がどう生活の場を確保していくかということを考える場だと思うので、入所施設の役割やグループホームの役割をどうするかを考えていかなければならないと思う。それには、入所施設に入れない人や短期入所を利用人の問題も含まれると思う。入所施設から出ることが良い悪いということまで考えなくても良いのではないかと。
- ・在宅への支援という視点で見ると、重度訪問介護というサービスがあるが、在宅の方が重度訪問介護を使うのは、正直、厳しい面があるとも思う。在宅で生活している中に、ヘルパーが入ってきてもうまくいかないこともある。

	<p>それらも踏まえた在宅を支える仕組みも考えていかなくてならないと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・理想論を話すことも必要だが、現実的に進めていく中では、例えば単価の問題など、理想のどおりに進められない難しい部分も出てくる。細かいところは議論できないかもしれないが、その辺りも頭の片隅に入れながら議論を進められると良いと思う。</li> <li>・自閉症の人の住まいを考える中で、生活の問題や人の問題を全て含めて考えると、なかなか議論が進まない。住まいの問題と生活を支援するための機能の問題は、切り離して議論を進めていくことも必要だと思う。「自閉症の人に学ぶ」という視点は、まさにそうだと感じる。自閉症の方は、他人がどう思うかで行動する（行動を変える）人ではないと思う。だから、理解してもらうことが難しいのではないかと思う。そういったことが基本にあるということ、自閉症の人を考えるのには本人から学ぶしかないということ、そして、それをどう積み上げていくことではないかと思う。</li> </ul> <p style="text-align: center;">— 次回は7月29日の開催であることを確認し、散会 —</p>
<p>特記事項</p>	<p>本日配付した資料は、個人情報に記載されているので、一部の資料を委員限りとするのを、会の総意として決定した。</p> <p>また、議事録についても、個人情報に配慮した作りにすることを決定した。</p>